

## 第一章 変法期における学会、報刊、学堂の概要

### 第一節 概 観

本章においては、変法期の学会、報刊、学堂の概要を述べて行く。

まず、学会から見て行く。すでに見たように、康有為は、日清戦争の敗北、三国干渉などを通し、中国の領土が瓜分されて行く中で、変法を意図したが、高級官僚にはばまれ、方向を多角化して、北京強学会を最初とする学会設立運動を行うようになった。

従来、中国には、学会というものはなかったが、西欧において、学会が設立され、学問が発達して人材が養成され、独立富強の中国が建設されることを知って、それを見習おうとしたものであった。

また、報刊も、変法がなかなか困難なので、国民の議論を喚起し、国民の精神を刷振し、他日の用を期し、康有為が、京師に『万国公報』を創刊し、士夫貴人に配布したのが、最初であった。そして、それがやがて発展して、種々の報紙が発行され、変法思想を鼓吹、宣伝して行くことになった。

最後に、学堂は、変法を行う人材を育成することを意図して、洋風の学校として創設されたものであった。そして、その中心となったのが、京師大学堂、即ち、後の北京大学であった。学堂の多くが、戊戌政変によって、人材を輩出する以前に弾圧されたが、時務学堂は、自立軍起義を通して、辛亥革命に接続し、京師大学堂は、その後の中国の学問、文化の中心となって行った。

以下、学会、報刊、学堂について、述べて行く。

### 第二節 変法期の学会

はじめに

本節を書くに当たってまず踏まえて置きたいことは、中国近代史の発展が基本的には中国の内在的発展の必然的な過程であったということである。<sup>①</sup>中国近代史の政治的な側面を考察して行くならば、洋務運動、変法運動、革命運動の流れとして把握出来ると思うが、小論においては変法運動を取り上げ、とりわけ学会運動の側面から変法運動を理解して行きたいと考えている。

戊戌変法期における学会の役割についてはすでに諸先学の取り上げておられる所である。今簡単にそれらを整理するならば、小野川氏は学会が変法を目指す改革的な機関であるとされており、<sup>②</sup>同様な立場は菊池氏も湯志鈞氏も取っておられ、本節も基本的にはこの考え方に依拠するものである。しかし小野川氏は政治思想の立場から述べておられるので、学会それ自体についてはあまり深く掘り下げておられない。また、菊池氏は広学会、強学会、南学会については考察されておられるが、<sup>③</sup>学会全般についてはまだ考察されていない。又湯志鈞氏は学会を官僚と士大夫間の団結をはかるものとして考察され、<sup>④</sup>更に設立された学会の名称、設立者、内容などについて述べておられ、<sup>⑤</sup>学会全体について考察されている。そこで本節では、私なりに諸学会の実態と性格をその先駆形態、機能、階層

構成、年代的地理的分布の面から考察し、それが変法運動において果たした役割を明らかにして行きたい。

## 1、学会の先駆

アヘン戦争以後、中国は対外的には外国資本主義に国内をおびやかされ、内部的には清朝の封建支配体制の矛盾が、いよいよ激化し、民衆による反帝国主義、反封建主義の運動が展開されて行くことになる。まず封建支配体制に反対するものとして、太平天国の運動が行われたが、それは外国人の協力を受けた漢人官僚を主力とする清朝支配勢力によって圧殺され、ここに李鴻章、曾国藩等を中心とする洋務運動が開始された。

しかし、洋務派の李鴻章によって創建された北洋陸海軍が、日清戦争に敗北した結果、下関条約が締結され、引きつづいて三国干渉が起こった。このような状況下にあって、中国分割の危機を感じ変法のやむなきを痛感した、読書人階層の1人であった康有為は、光緒14年に第1回の上書を出し、ついで挙人千三百余人による、公車上書を行い、更に第3、第4回の上書を行なったが、彼の変法の意図は、いずれによっても皇帝に達しなかった。そこで康有為は上書運動のみでなく、方向を多角化して変法の緊急性についての一大啓蒙運動を展開し、中国人を中心とする中国最初の学会である、強学会を光緒21年7月北京に設立したのであった。北京強学会を最初とした戊戌変法時期を中心とする諸学会はすぐれて政治的な理由から設立されたものであり、後述するようにここを一つの拠点として変法運動が遂行され、戊戌変法にまで至るのであるが、このような諸学会の成立にあずかって力があり、その先駆形態をなしたものについて以下考察して行きたいと考える。

強学会を最初とする変法時期の諸学会の成立にあたっては、西学の影響、なかならず広学会の影響が強くあったと考えられるが、同時にそれ以上にこのような西欧的な学会を受け入れる中国側の基盤としての中国在来の書院の存在が考えられるので、以下二方面からこれら変法期の諸学会の先駆をなすものについて考察して行きたい。

まず西学の影響について考えて行くが、梁啓超は『時務報』の第10冊に「論学会」と題する論文を掲げ、その中で西洋には一つの学問に対して必ず一つの学会があり、学会の加入者は上は王公から下は一般庶民にまで至り、これらの学会での日夜の研纂の結果、学問が発達し、人材が輩出し、国勢が富強となるのであり、だから中国においてもそれぞれの専門分野における学会を全国の各省、各州、各府、各県、各郷ごとに設立して中国の危機を救うべきだと述べている。<sup>⑥</sup>

即ち、梁啓超の考えによれば、学会が設立されることによって学問が発達し、人材が養成され、国勢が富強となり、中国を瓜分の危機から救うことが出来るというのであり、ここに変法自強の考えが明確にうかがわれる。すなわち、このような意図があってはじめて、西欧人を中心とする広学会にならって中国人の手になる最初の学会である強学会やそれ以後の学会が成立して行くのである。

一方、中国に西欧風の学会が成立し得るためには、西欧の文化を受け入れる中国在来の文化的な素

地の存在が必要であったと考えられる。ここに諸学会の基盤の一つとしての中国在来の伝統的な教育機関である書院の存在が考えられるのであり、たとえ強学会が直接書院の上に建てられなかったとしても、後述するように、その後の諸学会の発展はこれら書院の存在を抜きにしては、考えられないのである。

それでは戊戌変法時期にこのような役割を担った書院というものは一体どのような性格を持っていたのだろうか。劉伯驥氏は書院の性格を次の5点に要約されている。<sup>⑦</sup>

1、講学の風気の提唱

2、社会清議の樹立

3、学術発展の中心

4、人材創造の場

5、経籍の所蔵

この要約に従い、書院の性格を変法期の学会がどのように継承発展させて行ったかを以下考察して行く。第1に書院がもっていた、「講学の風気の提唱」、「学術発展の中心」、「経籍の所蔵」という性格は、くわしくは学会の機能と性格の所で後述するように、いずれも変法期の学会に継承され、それが一層拡大発展されたのであった。第2に「人材の創造」という書院の性格であるが、書院出身者が読書人層となり、官僚層となって、中国在来の文化を担い、政治に参加して行ったように、変法期の学会参加者も又、在来の文化、政治を踏まえ、その上に新しい文化を導入し、政治改革運動を推進して行こうとしたのであった。第3に「社会清議の樹立」という書院の性格であるが、この書院の性格に対しては、変法期の学会の性格はすぐれて政治的であったので、そのままには継承されなかった。しかし、一面においては、このような書院の無政治的性格こそが書院を学会に替えて行くことをかえって容易にしたり、又変法推進者が変法運動を学会運動と名を替えることにより、より容易に遂行できた原因の一つともなったのではないだろうか。

このような点から変法運動を遂行して行くためには、中国在来の書院を基盤にしてその上に変法思想を盛り込んだ学会を接木して行くことが、極めて効果的であったと考えられるのである。

それでは、書院を如何にして学会に転化させて行ったのであろうか。この場合、次の二つが考えられる。即ち第1は在来の書院を学会の基礎ともなるべき近代的な学堂とすることであり、第2は書院そのものを直接学会に改変するという方法であった。前者についてまず見て行くならば、譚嗣同は、「改併劉陽城郷各書院為致用学堂公啓」をあらわしてその中で、「今、旧の6書院と新立の算学館を併せて一つとし、改めて県城に学堂を建てる」<sup>⑧</sup>とっており、旧い書院を学堂に改めることを主張している。

また「知新報」には、学堂を作る費用がないので書院に算学の1課目を加えるといっている。<sup>⑨</sup>

さらに、張之洞も「勸学篇」の中で、……日に学を設け、広く学堂を立てる。……<sup>⑩</sup>

と述べ、学堂の設立に言及している。なおこれらの意図は光緒24年5月22日の詔勅となって実現し

ている。

次いで後者について見て行けば、江標は「湘学新報」の中で、

うやうやしくも朝廷の、しばしば書院を整頓し、広く実学を求める議にあい、勉めて輿地、算学、方言学会を校経書院に設ける。<sup>⑪</sup>

と云っており、校経書院に輿地、算学、方言学会を設置すべき事が主張されている。

又譚嗣同は、南学会第8回の講義で次のように云っている。すなわち、

今人々が皆この理を明らかにしようとするならば、皆界域を破除し、出て事を任せるのには、また学会でなければならない。だから今日の救亡保命、至急で緩やかにすべきでない上策は、学会に過ぎるものがない。私は、各府州県が有している書院を概ね学堂、学会とし、一面では人材を造り、一面では衆力を合わせて官民上下が通じて一気となり相維繫し協心会謀することを願う。

そうすれば、内患は休ませることができし、人々、全体は安んずることができる。<sup>⑫</sup>

とあり、中国の救亡保命の上策として学会を見ており、各州県の書院を学堂、学会に改めて人材を養成し、患いをなくして、社会生活を安定させる事を説いている。すなわちここでは書院が学堂にかえられるだけではなく、学会にまで高められなければならないと主張されていることが知られるのである。

以上、書院を学会の基礎となるべき学堂ならびに学会そのものに改変させるべきことが主張されていることを考察したが、これらのことを通して書院が中国における学会成立の基盤の一つになったことが知られる。つぎに、このようにして成立した学会の機能と性格について考察して行く。

## 2、学会の機能と性格

本項においては、学会の機能と目的を明らかにして、その性格を追及して行きたい。

そのための手懸りとして史料にもとづいて学会の機能と目的を表にまとめて置く。<sup>⑬</sup>

学 会 名	機 能								目 的
	章程	役 員	図 書 (図書館)	報 館 (報 館)	器 具 (博物館)	学 堂 (義 塾)	西 学 (翻訳)	儒 学 (人會金)	
[広 学 会]	○	督 弁	○	万国公報	○		○		西欧文化の普及
北京強学会	○	書 記 員 提 調	強 学 書 局	(万国公報) 中外紀聞 (中外公報)	○	意 図	○	○ 寄 附	変法・啓蒙 西学・儒学
上海強学会	○	提 調 董 事	○	強 学 報	○	意 図	○	○	変法・啓蒙 西学・儒学
[官 書 局]	○		○	官 書 局 報 官 書 局 彙 報	○	京 師 大 学 堂	○	○ 書 局 運 営 費 一 十 兩	訳書 北京大学の前身
[時 務 報]	○	総 理 述 英 文 翻 訳	○	時 務 報 官 報					時 事

農 学 会 (務農会)	○	辨 理	○	農 学 報	農機具	農 学 務 堂	○			農 学
聖 学 会	○	総理、值理、 董事、合併、 坐弁、司帳、	○	広 仁 報	○	義 塾 学 堂	○	○	寄 附	儒学・西学
方言学会							○			英語
輿地学会							○			地理
算 学 会 (湖 南)							○			数学
蘇 学 会	○	経理・協理 分理	○			講 堂	○	○	会 費 銀五円	儒学・西学
質 学 会	○		○	質 学 報			○	○	寄附六 両以上	儒学・西学
算 学 会 (上 海)				新 学 報			○			数学
湘 学 会										政治的
医学善会							○			医学
戒鴉片煙会	○	司書(無給)		文 書 意 図					寄 附	鴉片禁止
遊 歴 会							○			旅行
化 学 会							○			化学
格 致 会							○			博物
工 芸 会							○			工芸
紅 十 字 会							○			赤十字社
大同訳書局	○						経済 特科 ○	○		西学書 翻訳
蒙学公会	○		○	蒙 学 報		師範学校 中等専門 学校(意図)	○	○		児童教育 教育研究
訳書公会	○	総理、協理	○	訳書公会報			○		共 出 同 資	各国書訳
南 学 会	○	総会長、主講 政教、天文、 坐弁、地理、 会友、講演者		湘 報		講 義	○	○		政治的 議會を意図
粵 学 会										政治的
知 恥 学 会	○								寄 附	国家の滅亡を 防ぐ
西 学 会	○		○				○	○	会 費 二十金	民政、言語 測算
経済学会							○			経済学
女 学 会		董 事								女子啓蒙
顕 学 会										(学問をあら わす)
地学公会							○			地学



味経学会						○	○		儒学・西学
群学会									(共同生活)
公理学会									(公理をあきらかにする)
群萌学会	○	会董・副董 辨理	○	湘学报を利用	○		○	○	相互啓蒙
陕学会									保国会支部
致用学会	○		○				○	○	西学、儒学 時事
南学会分会	○								南学会的
明達学会	○	総理・董事 教習	○		○	教習あり	○	○	会費附 寄 人材養成
郴州学会 (郴州興算 学会)	○	総理・分理 董事	○		○	意 図	○	○	寄附出資 体育、儒学 西学
保国会	○	総理・值理・常 議員・備議員・ 董事・筆帳	○	意 図	○	講 義			寄附銀二両 国を保つこと 各省に拡大
保漢会									保国会分会
保浙会									同前
保川会									同前
法律学会	○	会 員 平 等	○				経済 正科 ○	○	万国の法律
任学会	○		○		○	意 図	○	○	寄附二 元 儒学・西学
学戦会									戦術
延年会	○								健康保持 長生き
校経学会							○	○	儒学・西学
関学会									政治的
蜀学会									同前
閩学会									同前
属志学会									(学問にはげむ)
同心会								○	心を一つにする
不纏足会 (上海)	○	董事・司事 (無 給)	○			女 学 校			纏足禁止
不纏足会 (湖南)	○								同前
不纏足会 (広 東)	○								同前
不纏足会 (福 建)	○								同前
不纏足会 (新加坡)	○								同前

測量学会	○				○		○		測量・地理 気象・天文
算学会 (福建)							○		数学
新学会				新学報			○		数学・政治学 医学・博物
集学会									(集合して政治社会を討論する)
匡時学会									(時弊を正す)
勸学会									(学問をすすめる)
[自立会]		会長・副会長・総幹事							革命的
[農学会]									孫文が設立

以上の表により、学会の機能と目的のあらましがわかる。それらは学会のもっている章程やその他の史料によったのであるが、表を見て知られるように、章程すらも史料からうかがえない学会が多いのである。

すなわち表には63の学会があるが、ただ名前のみ判明している学会もあることを考慮に入れた上で、学会の機能と目的をまとめ、その性格を追及して行きたい。

まず機能から考察して行く。学会の機能としては、第1に学会が章程を有していることである。この章程によってその学会の大体の内容を知ることが出来るが、63の学会のうち章程があると史料から判明できないのは28である。後述もするようにこれらの学会はいずれも変法を目指して設立されたものであったが、これらは、光緒21年から、光緒24年の戊戌政変までに続々と設立され又廃止されたものであり、学会の中には、開設期間や章程のはっきりしないものが多い。

また、章程があってもそれが、改訂されることはしばしば見られる例であった。これらの事を通して、この時期に急激に学会運動がたかまり、それと同時に変法運動も高揚されたことがわかる。

第2に学会にはそれを運営して行く役員がおり、表によれば、14の学会にそれがあったことがわかる。その中で2回以上用いられているものをあげれば次の如くである。すなわち董事(7回)、総理(6回)、提調、辨理、値理、分理、坐弁(人)がそれぞれ2回ずつである。これらの役職の中で、最高のもので1番多く使われているのが総理である。

第3に学会には、図書を所有しているものが多く見られ、その数は17にのぼっている。そしてその中で進んだ図書館の形態を取っているものも1、2あった。即ち学会員は書籍を通して外国の近代的な学問などにふれ、相互に討論しながら変法思想を高めて行ったのであった。

第4に、学会の中には変法への志向をもった新聞或いは学報などの印刷物を出版し得たものもあった。いまその数をあげれば、学報を有している学会が10あり、それを意図してたものが2、他の報を利用していたものが1あることが知られる。学報こそは、変法運動を鼓吹して行くのに大切な機関となったのであった。

第5に学会は外国の新しい文化を取り入れるために図書だけでなく、特に自然科学の分野において、器具をも備えている様子が10の学会に見られるのである。清朝の改革を遂行するためには、どうしても西欧の近代文化を摂取する必要があり、しかも伝統的な清朝の学問と最も相違するものの一つがこのような自然科学であったという事は、容易に理解出来る所である。

第6に学会には学堂を持っているものもあった。まず学堂をもっている学会が3、学堂創設を意図した学会が5、学堂までいかなかったが講義を行った学会が2あった。このような活動を通して、変法運動を行う後継者や、人材の養成をはかったことが知られるのであり、このような教育的な方法は、かなりの有効性を持っていたと考えられる。附言すれば、変法運動においては、学会と報刊と学堂の三者が非常に大切な役割をなし、それが三位一体となり有機的に行われるか、否かが変法運動の発展に大きな影響を与えたと考えられる。

第7に学会では、当然学問が重要視されたが、西学を学ぶ学会が34あり、そのうち経済特（正）科を設けているものが2ある。このような状況と、章程のある28の学会のうち21の学会が西学を学んだということから考察すれば、西学に対する関心が非常に高かったことが知られるのである。その上、これらの学会では、ただ西学を学ぶというだけではなく西学書を訳すこともかなり行われた。ここから考えられることは、中国を分割の危機から救い出すためには如何にでもして先進諸国の例を学び、それらを自分達のものとして自強を計って行こうとした態度がうかがわれるのである。

第8に学会では西学と同時に伝統的な儒学も学ばれた。儒学を学んでいる学会が21見出されるが、これらの学会のうち17は、西学も合わせて学んでおり、彼等は、儒学を西学に附会させる方法を取り、それ故、一層儒学を意識的に尊重する態度が当時の読書人階層、士大夫階層に見られ、これらの考えが、変法運動の性格、方向を清朝体制の枠内に限定させる役割を果たしたのではないだろうか。

第9に学会の経済的な背景をみて行くと、章程よりそれが判明できる学会は12あり、寄附だけに頼っていた学会は7、会費に依存する学会は2、共同出資による学会が1、会費と寄附に依存する学会が1、会費と出資に依存する学会が1であった。以上から判断されることは、当時の学会が、図書や器具を整えたり、学報を出したり、講義をしたりするのにかなりの財源を必要としたのであり、それには、彼等の出す会費や寄附だけでは足りず、有力者である上級官僚にも寄附を依頼したであろうことが考えられるし、また、実際、強学会などには多くの有力者が寄附していることが知られるのである。<sup>⑭</sup>このように学会を運営する上でも、一部の上級官僚の援助を仰ぐことが必要不可欠であった事が考えられる。ここにも又学会運動の特徴が見出されるのではないだろうか。すなわち、中下級官僚だけで学会運動や変法運動が推進出来たのではなく、皇帝を頂点とする上級官僚に依頼する中ではじめて、運動が可能となり得たし、それゆえ運動の挫折もまた上層部の反対によって左右されるものとならざるをえなかったのである。

最後に各学会の目的について考察し、学会の性格を追及して行きたい。章程により、目的の知られる学会は56、名前から見当がつくものが7あるが、今その目的のあらましを分類して行く。最初に断っ



ておきたいことは、変法時期の諸学会の性格はいずれも、強学会に強く影響されており、私の考察によれば、強学会の性格と意図をその後の学会が継承発展させているとってまず間違いないのではないと思われる。なお、強学会については改めて論及したいと思うので今は略述するに留めるが、後述する諸学会の性格である「政治的」、「啓蒙的」、「西学的」、「儒学的西学的」性格のすべてを内包していたのではないと思われる。なおこの性格区分について一言しておけば、変法期の諸学会はいずれも変法を志し、政治的性格が強いのであるが、第1にあげた「政治的学会」というのは、その中でも最も政治性の強いものであり、「啓蒙的学会」というのは、政治性もさることながら、特に大人、女性、子供に対する啓蒙的な性格が強い学会のことである。又「西学的学会」というのは、欧米のいわゆる学会に近い性格を持ったものであり、「儒学的西学的学会」というのは、儒学を中心としてそれに西学を加えたものである。

■ なお、ここでの学会の性格は、学会、報刊、学堂の全体的組織から見れば、「政治的学会」は、「時事的政治的組織」に対応し、「啓蒙的学会」は、「啓蒙的組織」に、「西学的学会」と「儒学的西学的な学会」は、「教育、学問的組織」に対応している。

■ まず政治的な学会と考えられるものには、北京強学会、上海強学会、南学会、粵学会、知恥学会、陝学会、保国会、閩学会、蜀学会、湘学会、保滇会、保浙会、保川会等13あり、史料から直接知る事は出来ないが、前述のような学会は外にもあったと思われる。これらの学会は変法を実施させる一つの原動力となったと思われる。これらの学会で、北京強学会、上海強学会について規模も大きく、影響も大きかったのは、南学会、保国会などであるが、これらの学会については後述したい。

■ 次に啓蒙的な学会について考察して行く。この中に数えられるものは12以上あり、群萌学会、延年会、不纏足会、戒鴉片煙会、紅十字会、女学会、群学会などをあげることが出来る。さてこれらの学会の性格は、いずれも啓蒙的要素が濃厚であり、大人に対する啓蒙として、群萌学会、群学会、延年会等が挙げられるが、女性に対するものとしては、不纏足会、女学会などが考えられる。

■ そして更に子供に対する啓蒙としては、蒙学公会をあげる事が出来るが、これはただ、子供を啓蒙するだけでなく、教育について研究する学会でもあり、西学的学会の性格も濃厚である。

■ これらの学会は、変法実施後、実施された変法の詔勅の内容と密接な関係を持つのである。更に啓蒙的学会も強学会の性格の発展したものである事は、多言を要しまい。

■ 次に学問的な学会について考察して行きたい。この場合純粋な西学的学会と儒学的西学的学会とを区別する方が適当であるので、まず、西学的学会について考察して行く。西学的学会は18以上あり、大同訳書局、医学善会、西学会、新学会、測量学会、地学公会、方言学会、輿地学会、遊歴会、化学会、格致会、工芸会、訳書公会、経済学会、法律学会、算学会、郴州学会、学戦会などがあげられる。これらの学会の性格としては、西学が重要視され、儒教的なものは、あまり史料に出てこない。すなわち西欧の学会に最も接近したものであると考えられるのであり、中国を近代国家にするためには、このような学会が必要とされたのである。

これらの学会を更に分類するならば、西学書を訳す事を中心とする初歩的な学会がまずあげられる。そしてその上に西欧風の学問研究を中心とする学会がある。

最後に、儒学的西学的学会について述べて行きたい。これには、聖学会、蘇学会、質学会、味経学会、校経学会、致用学会、明達学会、任学会、同心会等9以上が数えられる。これらは、儒教と西学とを一致させたものである。

なお、6項でも述べるように、これらの学会の影響を受け、それに前後して、光緒帝が変法の国是を定め、光緒24年4月23日(旧暦)より変法体制が実施されて行く。

以上学会の機能、目的の考察を通して、学会の性格を明らかにし学会を4種に分類した。

以下次項においては、これらの学会に参加した学会参加者の階層構成について考察を進めて行きたい。

### 3、学会参加者の階層構成

本項では学会参加者の階層的構成を明らかにして行くが、その手懸りとしてまず史料にもとづいて学会参加者を表示して置く。<sup>15)</sup>

学 会 名	参加者名	出 身	官 職 (又はそれに代わる資格等)	学会における役職
北 京 強 学 会	康 有 為	広 東	工部主事	書 記 員
"	梁 啓 超	広 東	举 人	
"	文 廷 式	江 西	翰林院侍読学士	
"	袁 世 凱	河 南	浙江温处道	
"	陳 熾	江 西	戸部郎中	
"	張 仲 炘	湖 北	御 史	
"	王 会 英	広 西	給事中	
"	翁 斌 孫	江 蘇	翰林院編修(翁同龢の従孫)	
"	丁 立 鈞	江 蘇	翰林院編修	
"	曾 広 鈞	湖 南	翰林院編修(曾国藩の孫)	書 記 員
"	江 標	江 蘇	翰林院編修	
"	汪 太 燮	浙 江	總理衙門行走・内閣中書	
"	沈 曾 植	浙 江	刑部郎中	
"	沈 曾 桐	浙 江	翰林院編修	
"	張 樞	直 隸	主 事(張之洞の子)	
"	徐 世 昌	直 隸	翰林院編修	
"	楊 銳	四 川	内閣中書	
"	王 之 春	江 蘇	布政使	
"	龍 殿 揚	江 蘇	提 督	
"	程 文 炳	直 隸	提 督	

"	張孝謙	直隸	翰林院編修
"	洪良品		給事中
"	褚成博	浙江	給事中
"	陳仰垣		
"	李提摩太	英國	宣教師
"	欧格納	英國	駐華公使
"	李佳白	米國	宣教師
"	畢德格	米國	宣教師
"	翁同龢	江蘇	戸部尚書、軍機大臣、師傅、協辦大學士
"	孫家鼐	安徽	吏部尚書、大學士、師傅
"	劉坤一	湖南	兩江總督、大學士
"	張之洞	直隸	湖広總督、署兩江總督、大學士
"	宋慶	山東	四川提督
"	聶士成	安徽	直隸提督
"	王文韶	浙江	直隸總督、北洋大臣
"	李鴻藻	直隸	軍機大臣、大學士
上海強学会	康有為	広東	工部主事
"	梁啓超	広東	挙人
"	黃遵憲	浙江	領事官(元)
"	梁鼎芬	広東	翰林院編修
"	黃體芳	浙江	兵部侍郎(元)
"	黃紹箕	浙江	翰林院編修
"	黃紹第	浙江	翰林院編修
"	汪康年	浙江	進士
"	屠仁守	湖北	御史
"	蒯光典	安徽	翰林院檢討
"	張謇	江蘇	翰林院修撰
"	陳三立	江西	吏部主事(陳宝箴の子)
"	岑春煊	広西	候補知府
"	沈瑜慶	福建	候補道(沈葆楨の子)
"	左孝同	湖南	候補道(左宗棠の子)
"	周化鈞	福建	吏部主事
"	喬樹楠	四川	刑部主事
"	陳宝琛	福建	内閣學士
"	黎庶昌	貴州	道員
"	志鈞	滿州	翰林院編修
"	張之洞	直隸	湖広總督、大學士

"	章炳麟	浙江	拔貢生		
"	鄒陵瀚	江西	部郎		
"	顧璜	江南	通政使(元)		
"	龍沢厚	廣西	知 県		
"	鄒代鈞	湖南	候選知県		
"	沈曾熾	浙江	刑部郎中		
"	張孝謙	直隸	翰林院編修		
"	袁世凱	河南	浙江溫処道		
農 学 会	梁啓超	廣東	举 人		
"	蔣 黼	江蘇			
"	羅振玉	浙江			
"	徐樹蘭	浙江			
"	朱祖榮	江蘇			
聖 学 会	唐景崧	廣西	台湾巡撫		
"	岑春煊	廣西	候補知府		
"	康有為	廣東	工部主事		
"	蔡希鄒		廣西按察使		
"	向子振		廣西道員		
不纏足会(上海)	袁世凱	河南	浙江溫処道		
"	汪康年	浙江	進 士		
"	麦孟華	廣東	举 人		
"	梁啓超	廣東	举 人		
"	康 広仁	廣東	(康有為の弟)		
"	張通典	湖南	知 県		
"	鄒陵翰	江西	部 郎		
"	呉 樵	湖南			
"	譚嗣同	湖南	候補知府		
"	龍沢厚	廣西	知 県		
"	頼振寰				
"	張壽波	江蘇			
測 量 学 会	楊文会	安徽	元駐英露公使隨員		
"	譚嗣同	湖南	候補知府		
蘇 学 会	章 鈺	江蘇			
"	張 一 馨	江蘇			
"	孔昭晋	江蘇			
医 学 善 会	梁啓超	廣東	举 人		
"	呉 仲 弢	湖南			

大同訳書局	康 広 仁	広 東	(康有為の弟)	
"	沈 曾 植	浙 江	刑部郎中	
"	張 蔭 桓	広 東	戸部侍郎	
"	翁 同 龢	江 蘇	戸部尚書、軍機大臣、師傅、協弁大学士	
蒙学公会	葉 翰	浙 江	生 員	
"	曾 広 銓	湖 南	知 府	
"	汪 康 年	浙 江	進 士	
"	汪 鍾 霖	江 蘇		
訳書公会	董 康			
"	趙 元 益	湖 北		
"	吳 宗 濂	江 蘇		
南学会	皮 錫 瑞	湖 南	江西南昌経訓書院主講	学長、主講
"	張 通 典	湖 南	知 県	
"	秦 力 山	湖 南	補県学生	
"	陳 宝 箴	江 西	湖南巡撫	講 演 者
"	黄 遵 憲	広 東	湖南塩法道	政 教
"	梁 啓 超	広 東	挙 人	
"	陳 三 立	江 西	吏部主事	
"	熊 希 齡	湖 南	翰林院庶吉士、時務学堂教習、提調	(新士) 会 員 部 下
"	譚 嗣 同	湖 南	候補知府	天 文
"	戴 德 誠	湖 南	候選訓導	坐 弁 人
"	唐 才 常	湖 南	拔貢生	
"	江 標	江 蘇	学 政	
"	徐 仁 鑄	直 隸	学 政	
"	鄒 代 鈞	湖 南	候補知県	地 理
"	畢 永 年	湖 南	拔貢生	
"	樊 錫	湖 南	拔貢生	
"	易 鼎	湖 南		
"	黄 膺			坐 弁 人
"	楊 自 超		知 県	
"	欧陽中鵠	湖 南	舍 人	講 演 者
"	李 維 格	江 蘇	監 生	講 演 者
"	向 味 秋	四 川	山 長	講 演 者
"	曾 広 鈞	湖 南	翰林院編修	講 演 者
"	喬 樹 楠	四 川	刑部主事	講 演 者
粤学会	康 有 為	広 東	工部主事	
知恥学会	壽 富		翰林院庶吉士	





法律学会	楊銳	四川	內閣中書	劉 丁	
"	李廷豫	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	
"	周 燕	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	
"	嚴毓清	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	
"	金鼎春	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	
"	施文森	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	会 友
"	李海寰	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
"	沈嗣衡	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
"	施文森	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
"	豐文達	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
"	吳文培	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
"	劉佐楫	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
"	洪潤	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
"	周宝廉	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
"	李炳寰	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
"	李廷鏞	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
"	俞成銑	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
"	蘇煦	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
"	李昶	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
"	端木勛	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
"	陳增冲	江 蘇	江蘇按察使	孫 百	"
延年会	熊希齡	湖 南	翰林院庶吉士、時務学堂教習、提調	孫 百	会 友
"	譚嗣同	湖 南	候補知府	孫 百	"
閔学会	宋伯魯	陝 西	山東道監察御史	孫 百	"
"	楊深秀	山 西	山東道監察御史	孫 百	"
"	李岳瑞	陝 西	工部員外郎	孫 百	"
蜀学会	楊銳	四 川	內閣中書	孫 百	"
閩学会	林旭	福 建	內閣中書	孫 百	"
"	張鉄君	福 建	內閣中書	孫 百	"
属志学会	高凌翰	江 西	部郎	孫 百	"
"	公菴	江 西	部郎	孫 百	"
同心会	宋名璋	江 西	部郎	孫 百	"
"	夏承慶	江 西	部郎	孫 百	"
"	夏敬親	江 西	部郎	孫 百	"
[上海訳書局]	梁啓超	広 東	事務辦理	孫 百	"
[自立会]	容 閔	広 東	駐米公使	孫 百	"
"	唐才常	湖 南	拔貢生	孫 百	"

嚴復	福建	北洋水師學堂總教習
文廷式	江西	翰林院侍讀學士

以上の表から、参加者207名の派別を范文瀾氏の所説によって、<sup>⑩</sup>まず見ておけば、右派の翁同龢、仮維新系の孫家鼎、袁世凱、張之洞、中間派の康梁系の康有為、梁啓超、麦孟華、左派の譚嗣同系の譚嗣同、唐才常などが参加している。

また、やがて変法運動が弾圧されてから、自立会という組織が作られ、自立軍と名前をかえて蜂起し、この中から、革命派に移る者が出て来るが、その中には、右派の嚴復、中間派の容闓の顔も見られる。

前述の表をもとにして学会参加者の官職（又はそれに代わる資格等）の分布と頻度数をみる。

官 職 (又はそれに代わる資格等)	度数	官 職 (又はそれに代わる資格等)	度数	官 職 (又はそれに代わる資格等)	度数	官 職 (又はそれに代わる資格等)	度数
主 事	16	総 督、大学士	3	生 員	2	揀 選 知 県	1
翰 林 院 編 修	12	総 督	3	吏部尚書、大学	1	候 補 知 県	1
举 人	11	候 補 道	3	士、師傅		領 事 官	1
(選) 候 補 知 府	9	給 事 中	3	軍 機 大 臣	1	翰 林 院 修 選	1
御 史	8	員 外 郎	3	大 学 士		翰 林 院 検 討	1
郎 中	7	侍 郎	2	總督、北洋大臣	1	候 選 訓 導	1
内 閣 中 書	7	巡 撫	2	内 閣 学 士	1	候 選 府 経 歴	1
道 員	6	翰林院侍讀學士	2	按 察 使	1	水師學堂總教習	1
知 県	6	戸 部 尚 書	2	通 政 使	1	書 院 山 長	1
拔 貢 生	5	軍 機 大 臣		中 允	1	書 院 主 講	1
提 督	4	師傅、協弁大学士	2	舍 人	1	駐 華 公 使	1
宣 教 師	4	学 政		候 選 知 県	1	学 生	1

以上の表によれば、学会参加者で一番多い官職（又はそれに代わる資格等）は主事（正6品）、候補知府（正4品）、翰林院編修（正7品）、举人、御史（従5品）、内閣中書（従7品）、道員（正4品）、郎中（正5品）などであり、道員を最高として、中下級の官僚が多いことが知られ、又大官の子弟も数名含まれ、総督（正2品）、大学士（正1品）、提督（従1品）、尚書（従1品）、軍機大臣（品秩無し）等の地位にあった者が学会運動の援助者に見られるのである。すなわち学会運動の推進者の階層は、変法運動の階層と重なるものであり、変法運動も又大官の援助のもとに中下級官僚層の手によって遂行されたのであった。

次いで学会参加者の個人別に見た参加学会数を主な者だけ見て行きたい。氏名の判明している学会参加者の中で一番多くの学会に加入したのは梁啓超であり、8学会、ついで康有為が6学会、譚嗣同が5学会、宋伯魯が4学会に参加している。3学会に参加した者は、楊銳、汪康年、袁世凱であり、

2学会に参加したものが14人であり、残りは全部それぞれ1学会に参加したことになる。すなわち、学会運動参加者は1学会のみに参加したものが圧倒的な多数を占めたのであり、これから見る限り、学会運動が比較的廣範囲に受け入れられたと思われる。

以下表で判明出来る学会参加者の出身地を延べ人数で多いものから順にまとめて行けば次のようになる。

順位	省 名 (又は国名)	人数	順位	省 名 (又は国名)	人数	順位	省 名 (又は国名)	人数	順位	省 名 (又は国名)	人数
1	広 東	48	7	江 西	20	13	雲 南	9	19	米 国	2
2	陝 西	37	8	広 西	16	14	安 徽	8	20	山 東	1
3	浙 江	36	9	直 隸	12	15	甘 肅	6	21	滿 州	1
4	湖 南	29	10	貴 州	10	16	河 南	5	22	河 北	1
5	江 蘇	25	11	福 建	11	17	湖 北	3			
6	四 川	22	12	山 西	9	18	英 国	2			

これから見れば、広東、陝西、浙江、江蘇、四川、湖南、江西の地域の人達が活躍しているということであり、学会の地理的分布ともある程度相関関係があったものと思われる。学会参加者と出身地域の事について前述したが、学会参加者は、学会参加者表にのせられた以外にも多く存在した。そこで今各地方の学会参加者の模様を史料によって明らかにしていきたい。

梁啓超の林旭伝には、「正月初の10日、大会を福建会館で開く。閩中の名士夫は皆集まる。君は実に閩学会の領袖である」<sup>①⑦</sup>とあり、福建省の士夫達が福建会館に集って閩学会を組織している様子がうかがえる。

また聖学開会には、「広西は近日風気が多に開け、皆、当該省の大吏士紳らが踴躍提倡している。だから一切の善挙は次第に興弁している」<sup>①⑧</sup>とあり、広西省の大吏士紳が学会運動に関心を寄せ、積極的に参加している様子が知られる。また梁啓超の譚嗣同伝には、

会を設けた意味は、將に南部の諸省の志士を合して連って一氣と為し、相ともに憂国の理を講じ救亡の法を求める。…7日毎に大に衆を集め学を講じ、会毎に集る者は千数百人である。君は慷慨して天下の事を論じ、聞く者で感動しない者はなかった。だから湖南省の風気が多に開けた。<sup>①⑨</sup>

とあり、南学会には千数百人も集会者があり、湖南省における変法運動の鼓吹に大きな役割を果たした事が述べられている。

最後に学会参加者の参加状態をもとに、各学会関連表を作り、各学会の関連を明らかにして行く。<sup>②⑩</sup>

年 代	政治的学会	啓蒙的学会	西学的学会	儒学的西学的学会
光緒21年	北京強学会 上海強学会			
光緒22年	[時務報]	[官書局]	農学会	
光緒23年	蘇学会 南学会 粤学会	測量学会 不纏足会 蒙学公会	医学善会 大同訳書局 西学会 経済学会	聖学会
光緒24年	陝学会 保国会 保川会 保浙会 保滇会 蜀学会 閩学会 閩学会	群萌学会 延年会	郴州学会 法律学会 〔上海訳書局〕	明達学会
光緒25年 以後	[自立会]			

この図表によれば、学会参加者の判明している29の学会のうち、26の学会において学会参加者は直接、間接の別はあっても、関連があったことが知られる。これ以外にも、相互に直接関連している2つの学会をあげる事が出来る。又学会は性格的にはそれぞれ特色を持ちながらも、それらの関係が非常に密接であったと考えられるのである。この事から学会運動が一定の連帯感の上に成立していたと云えるであろう。

以上学会参加者表を作成し、それを基本にして、学会参加者の官職の分布と頻度数、学会参加者の参加学会数、さらに学会参加者の出身地域の分布と地方郷紳の参加の実態、最後に各学会の関連を考察した。

以下次項においては、学会の年代的分布について明らかにして行きたい。

#### 4、学会の年代的分布

これからの変法期の学会の年代的推移を考察して行く。その方法として、変法期の年表<sup>②①</sup>と学会の設立年代についての表<sup>②②</sup>を史料にもとづいて、まずまとめて、以下それに対して考察を加えて行きたい。



変法期の年表

年 月	外 交	国内関係	変法派	学会関係
光緒14年			康有為上書（第1回）	
光緒18年 （1891年）	日清戦争開始	孫文、興中会を組織 恭親王、軍機大臣となる		
光緒21年 （1895年）	下関条約 三国干渉	孫文、農学会を組織 宣教師ら上海に天足会を組織 （月不詳）	康梁入京 広東、湖南の挙人、上書、公車 上書 康有為上書（3・4回） 康有為「中外紀聞」	
乙未 11		興中会広州起義	『強学報』を出版	
光緒22年 （1896年）	中露と密約	官書局設立		御史胡孚宸強学会弾劾を上奏 御史楊崇伊強学会弾劾を上奏
丙申 9		鉄路総公司設立	上海『時務報』設立	
光緒23年 （1897年）	ドイツ軍膠州湾を占領	商務印書館設立 張之洞、湖北に武備学堂を設立 することをゆるさる。	康広仁『知新報』を発行  唐才常、黄遵憲『湘学新報』を発行 嚴復、夏曾佑、王修国『国聞報』を発行 康有為上書（第5回）	
光緒24年 （1898年）	ドイツ膠州湾租借 フランス広州湾占領 ロシア旅順、大連を租借	張之洞『勸学篇』を著す。  恭親王死 光緒帝、国是を定め変法宣布す。 光緒帝、康有為を総署章京上行 走に任ず。  京師大学堂設立さる。 保家廟管理する 各地に小学堂、高等学堂設立。  農工商総局設立	康有為「日本変政考」と「俄大 彼得政記」を著す 康有為公車百余人と上書 （6回） 康有為英国と連合して露国を拒 するの奏陳 （7回）  嚴復「天演論」を著す 黄遵憲、譚嗣同を引見 康有為上書  梁啓超6品訳書局辨理に任ぜら る。  康有為『時務報』を辨事す 御史文悌は、宋伯魯、楊深秀を 劾す 譚嗣同、楊銳、劉光第、林旭、 四品卿、軍机章京 上行走在任 ぜられ、新政に参与す。  康有為、梁啓超、日本へ亡命 戊戌六君子北京城外にて処刑さ る。	御史黄桂均金、保浙会、保漢会、 保川会を劾す  御史譚庆瀾、保国会を劾す          報館の禁止、連名結社の禁
戊戌 8	康有為、伊藤博文と会見	光緒帝、議會制度をひらく 光緒帝、康有為、楊深秀に詔し 陳宝箴に変法の定見を堅持する ことを命ず。 光緒帝、康有為に出京を命ず 譚嗣同、袁世凱と会見 西太后、訓政を開始す 光緒帝瀛台へ幽閉さる		

学会設立表

年 代	学 会
光緒 21年	7月 北京強学会
	9 上海強学会
	? 広東不躰足会
光緒 22年	1月 官 書 局
	7 時 務 報
	11 ↑農 学 会
	12
光緒 23年	3月 聖 学 会 ↑算学会(湖南) ↑輿地学会 ↑方言学会
	4 不躰足会(上海、湖南、 福建、シンガポール)
	5 ↑測 量 会
	6 ↑蘇 学 会 ↑湘 学 会 ↑質 学 会
	7 ↑紅十字会 ↑工 芸 会
	8 ↑算学会(上海) ↑医学善会 ↑戒烟片煙会 ↑遊 歴 会 ↑化 学 会 ↑格致学会
	9 大同訳書局 ↑蒙学公会 ↑知恥学会
	10 ↑訳書公会 南 学 会
	11 経 済 学 会
	12 粵 学 会 西 学 会
	? 女 学 会
光緒 <sup>23</sup> 24年	顕 学 会 地学公会 味経学会 群 学 会 公理学会
光緒 24年	1月 ↑群萌学会 陝 学 会 ↑致用学会 南学会分会
	2 ↑明達学会 ↑郴州学会
	3 保 国 会 保 漢 会 保 浙 会 保 川 会
	4 ↑法律学会 閩 学 会
	5 ↑任 学 会 ↑学 戦 会 ↑延 年 会 ↑校経学会 閩 学 会 蜀 学 会
	6 勵志学会 同 心 会
光緒 25年	凡例 ↑ 表示されている年月より以前に出来た学会であることを示す。 ? 学会の設立された月が不明なもの
光緒 26年	8月 自 立 会

以上年表と学会設立表によって、学会の様子を明らかにしたが、それによれば、清朝が、光緒21年日清戦争に敗北した結果、馬関条約が結ばれ、引きつづいて、三国干渉が起こった。

このような状況下にあつて、康有為は7月にまず、北京に強学会を設立し、更に9月には、上海に強学会の分会を設立した。そしてそれを全国にひろめようとした。

この年、革命派は孫文を中心として、前年の興中会<sup>23</sup>にひきつづき、農学会<sup>24</sup>を組織している。そして興中会はこの年広州起義を計画したが失敗した。

他方この年にはアーキーバルド＝リットル夫人を中心として宣教師達が天足会を上海に設立している。<sup>25</sup>

しかし、北京強学会、上海強学会は御史楊崇伊の上奏によって禁止された。<sup>26</sup>

そこで、光緒22年には、学会が出来ず、僅かに、北京強学会を官書局にする上奏が胡孚宸からなされ、<sup>27</sup>上海強学会が、『時務報』に変えられ、<sup>28</sup>上海に学会が1つ設立されただけであった。その学会も、啓蒙的学会と学問的学会であり政治的傾向の弱いものであった。

しかし、強学会によって始められた、変法を志す学会は、これで消滅した訳ではなく、変法派の人達のやむにやまれない気持ちにより光緒23年に入ると続々と設立されその数も29以上となった。その内訳は、西学的学会が15以上、儒学的西学的学会が3以上で学問的学会は18以上、啓蒙的学会は8以上、政治的学会は3以上であった。

以上の事からこの時期の学会は、学問的学会が圧倒的に多かったことが知られる。更にこまかく見て行くなれば、この年の11月には、ドイツ軍の膠州湾占領があり、それ以前に出来た学会は26以上あり、内訳は14以上が西学的学会、儒学的西学的学会は4以上、啓蒙的学会は7以上であり、政治的学会は2以上であった。次いでドイツ軍の膠州湾占領以後に出来た学会は2以上であり、政治的学会1以上、西学的学会1以上であったことが知られる。

ここで考えられる事は、ドイツ軍の膠州湾占領によって、政治的学会がわずかではあるが増加した事である。又このドイツ軍の膠州湾占領により、康有為は光緒帝に第5回の上書を提出した。<sup>29</sup>

光緒23年から24年の間に設立された学会は、5以上あり、そのうち性格の判明出来る学会は、啓蒙的学会1、西学的学会1、儒学的西学的学会1である。

次いで光緒24年に入ると、前年の11月に行なわれたドイツ軍の膠州湾占領に対して、官僚層、読書人階層の反対が高まり、ここに続々と学会が成立し、光緒24年の変法の国是の直前までには、少なくとも10以上の学会が設立されたのであった。そのうち政治的学会6、啓蒙的学会1、西学的学会1、儒学的西学的学会2であった。

これらの学会の特色は、政治的な色彩が濃厚であり、全国組織をくわだてる学会も出来て来ており、その支部も続々と派生している。

すなわち外国の支配の危機の中で、それをはねのけるためには、すぐれて政治的な学会が必要とされたのであった。

このような時期にあって、康有為は「日本変政考」「俄大彼得変政記」などを皇帝に上呈し、光緒23年の膠変以後、第5、<sup>29</sup>第6、<sup>30</sup>第7<sup>31</sup>の上書を变法までになっている。

一方清朝上層部は4月(旧暦)に保守派の大立者、恭親王の死に当面することになった。ここに光緒帝みずから国是を定め、变法宣布を行う機会がついに到来した。これは变法推進者達の待望してやまなかった事柄であり、時まさに、光緒24年4月23日(西暦1898年6月11日)であった。<sup>32</sup>

この時から戊戌变法が行なわれる事になったが、この時期に設立された学会の数は、10を下らなかったと考えられ、政治的な学会は3設立されており、いずれも全国組織を志した学会の支部となるものであった。又この他に啓蒙的学会が2、西学的学会2、儒学的学会が3設立された。

この時期においては、变法の実施と共に、学会運動が光緒帝との結合により安定し、各方面に発展して来た事が知られる。

又この時期の学会の設立数は、光緒23年の膠変以後变法実施までに設立された学会設立数よりはるかに少なくなっており、この事は变法実施により、变法期における学会の役割も頂点を越え、变法そのものの実施に学会運動推進者の関心が移されていることを物語るのではなかろうか。以上から变法期の学会の役割は、变法を鼓吹することになったことがうかがわれる。

## 5、学会の地理的分布

变法期の学会の地域的分布について以下考察して行きたい。その手懸りとして、地域的分布表を史料にもとづいて作成した。<sup>33</sup>

学会の設立したためであった。また、その設立場所としては、出身地の会館等を利用して、  
三見られた。<sup>34</sup>  
ついで、変法以後、各地に設立された学会は3あり、いずれも政治的性質をもったものであった。  
以上の考察から知られるように、变法期に設立された学会は3あり、いずれも政治的性質をもったものであった。  
また北京に設立された理由としては、文化の中心であったこと、また、各地にその  
には多く存在していたことなどがあげられる。  
上海に設立された学会は10以上あり、そのうち1つは儒学会であった。学会会禁止後、全国で最初に設立された学会は光緒23年上海にできた儒学会であり、学問的性質をもったものであった。光緒24年にはこの外、啓蒙学会が1設立された。

ついで光緒25年には、2の学会が設立されたが、それらの性質は政治的性質をもったものの、西学的性質をもったものであった。光緒26年には学会は設立されなかった。

上海に設立された学会をとりわけ、西学的性質をもったものの、儒学的性質をもったものの、政治的性質をもったものが1つあり、2つは儒学会と啓蒙学会の中心であったことが知られる。この

学会設立地域表

年代	地域 直隸(北京)	江 蘇		陝 西	湖 北	湖 南	福 建	広 東	広 西	シンガポール	備考
		江 蘇	上 海								
光緒 20年以前			(広学会)								
光緒 21年	北京強学会		上海強学会								
光緒 22年	(官書局)		(時務報) 農学会								
光緒 23年			不纏足会(上海)			方言学会 算学会 輿地学会 不纏足会 湘学会			聖学会		ドイツ軍駐清占領(十一月二十三日)
		測量学会 蘇学会	算学会 戒烟片煙会			不纏足会 不纏足会 不纏足会	不纏足会	不纏足会		不纏足会	
			医学善会 大同識書局 蒙学公会 訳書公会 女学会		質学会						
	知恥学会 経済学会					南学会					
	西学会 粵学会										
光緒 23年 24年				味経学会		地学公会 公理学会		顕学会 羣学会 公理学会			
光緒 24年	陝学会 保国会 保滇会 保浙会 保川会 閩学会 閩学会 蜀学会					南学分会 羣萌学会 致用学会 明達学会 郴州学会 法律学会 任学会 学戦会 延年会 勵志学会 同心会 校経会					光緒帝愛法蘭西(四月十三日)
光緒25 以後			自立会								
年不 代明		匡時学会 勸学会 蒙学会					算学会				
計	13	5	10	1	1	20	2	4	1	1	



以下地域的分布表から考察されることを述べて行く。まず学会の地域的拡大である。すなわち学会は、まず北京に出来たが、それが拡大して、その数も、史料によれば60余となり、地域も8省以上に拡大された。それらを列挙すれば次のようになる。

すなわち北京、江蘇、湖南、広東、陝西、福建、湖北、広西等である。

以上学会の地域的分布について考察したが、学会が何故地域的に拡大したかということについては、次の2つの場合が考えられる。第1は学会に参加したものが、自分の出身地において学会を設立発展させた場合であり、<sup>③4</sup>第2には、学会参加者が自分に関係ある地域に学会を設立発展させた場合である。<sup>③5</sup>後者の場合には、学会参加者が、官僚として派遣された任地で学会の設立をしている例が見られる。<sup>③6</sup>

次いで表示により学会の設立地域を見ると、一定の地域にかたよりがあるのがわかる。すなわち北京に設立された学会、上海を中心として設立された学会、湖南省に設立された学会、広東省に設立された学会の4つに大別される。

まず北京には、13の学会が見られるが、光緒21年の強学会設立後、光緒22年には学会が設立されなかった。光緒23年に設立された学会は4学会ある。そのうちドイツ軍の膠州湾占領までには、政治的学会1と西学的学会1が僅かに設立されただけであった。その理由としては、政府の学会に対する監視が厳しかったことが考えられる。

ついで膠変以後に設立された学会は西学的学会が1、政治的学会が1であった。

光緒24年に設立された学会は8あるが、そのうち変法実施までに設立された学会は5あり、いずれも政治的性格をもったものであり、その名として地名を用いたが、これは在京官僚が、出身地別に学会を設立したためであった。また、その設立場所としては、出身地の会館等を利用している例が二、三見られた。<sup>③7</sup>

ついで、変法詔勅後、北京に設立された学会は3あり、いずれも政治的性格をもったものであった。

以上の考察から知られるように北京に設立された学会は3あり、いずれも政治的性格をもったものであった。

また北京に設立された理由としては北京が首都であり、文化の中心であったこと、また、官僚がそこには多く存在していたことなどがあげられる。

上海に設立された学会は10以上あり、その最初は強学会であった。強学会禁止後、全国で最初に設立された学会は光緒22年上海にできた農学会であり、学問的性格をもったものであった。光緒22年にはこの外、啓蒙学会が1設立された。

ついで光緒23年には、9の学会が設立されたが、それらの啓蒙的性格をもったものが5、西学的性格をもったものが4であった。光緒24年には学会は設立されなかった。

上海に設立された学会をまとめれば、西学的性格をもったものが5、啓蒙的性格をもったものが5、政治的性格をもったものが1であり、西学的学会と啓蒙的学会が中心であったことが知られる。この

ような性格の学会が上海に設立された理由としては、上海が中国の中では先進地域に属し、最初の開港場の一つであり、海関があり、後には租界が設立されるほど多くの西洋人が住んでおり、中国最初の西洋人の学会である広学会が設立された地域でもあったので、新しい学問や文化を容易に受け入れ、発展できる素地が出来ていたことが考えられる。

ついで湖南省を中心として設立された学会について考察して行く。まず、その数は20以上あり、各省中で一番多くある。湖南省に於いては、変法期の学会は、強学会禁止後に設立されたものであり、光緒23年には、西学的な学会が3成立した。これは強学会が禁止されたことが大きな原因であったと考えられる。すなわち、政治的、啓蒙的学会が、最初から出来ず、まず穩健な学問的性格をもった学会が出来たのであった。この年には、その後、政治的学会が2と啓蒙的学会1が出来た。次いで、光緒24年に設立された学会を見るならば、政治的学会が1、啓蒙的学会が2、西学的学会3、儒学的西学的学会5が成立した。このほか、光緒23年から24年にかけて、西学的学会が2設立された。

以上、湖南省に成立した学会は、政治的学会4、啓蒙的学会3、西学的学会8、儒学的西学的学会5であった。これによれば、湖南省では学問的学会が一番多く、それにつづいて啓蒙的学会、政治的学会が設立されていることが知られる。湖南省に学会が設立され変法運動が盛んになった理由としては、変法時期に湖南省には革新的な官僚が派遣され、<sup>38</sup>また、それに郷紳が協力したからである<sup>39</sup>と考えられる。

なおこの運動は、これ以後の湖南省の政治的運動に一定の役割を果し得たと考えられる。

また広東省においては、光緒23年には啓蒙的学会が1設立され、23年から24年にかけては、不明な学会3が成立している。広東省に学会が設立された理由としては、ここには開港場があり、また、学会運動推進者や革命運動推進者の出身地であったことなどがあげられよう。

今まで述べた地域の他に、学会の設立された地域としては、陝西、湖北、福建、広西があり、陝西には、儒学的西学的学会1、湖北には、儒学的西学的学会1、福建には啓蒙的学会1、西学的学会1、広西には儒学的西学的学会1が成立した。これらの地域の学会はおもに儒学的西学的学会であったことが知られる。

以上、学会の地域的なかたよりについて考察したが、北京には、政治的性格をもった学会が、上海には、学問的或いは啓蒙的性格をもった学会が、湖南省においては学問的学会、政治的或いは啓蒙的性格をもった学会が、広東省においては啓蒙的、儒学的西学的学会が主に設立されたことが知られる。

## 6、変法運動と学会

本項においては、変法運動の実施と学会の関連を明らかにして行くが、最初に変法運動の概要を述べておく。以下光緒帝の上諭により、変法の実施内容を明らかにして行きたい。

『戊戌変法第二冊』の光緒帝の上諭の項には、戊戌変法に関して二百五の上諭が載せられているが、<sup>40</sup>その主な内容を箇条書きにすれば、次の如くである。

- 1、人材の登用
- 2、変法派の起用
- 3、変法思想の普及
- 4、時務に通達すべき事
- 5、経済特科の新設
- 6、八股文の廃止
- 7、冗官冗員の廃止
- 8、役所の近代化と統合
- 9、国家の歳入歳出の管理
- 10、鉄道の敷設
- 11、鉱山の開発
- 12、農工商業の育成
- 13、民生の向上
- 14、留学生の派遣
- 15、外国文化の摂取
- 16、学堂の設立
- 17、学問の振興
- 18、報刊の設立
- 19、軍隊の改革
- 20、発明の奨励

これをまとめれば、政治、経済、文化教育、軍事の四方面に要約できるであろう。

まず政治面においては、人材の登用による変法推進者の起用があり、彼らは変法思想を普及して変法体制を作りあげた。その内容としては、時務に通達すべき事が強調されて、経済特科の新設と、八股文の廃止による科举制の改革が行なわれ、また冗官冗員の廃止による役所の近代化が実施された。経済面では、国家の歳入歳出をよく管理し、鉄道の敷設、鉱山の開発、農業、商業、工業を育成して、民生の向上を計ろうとするものであった。文教面においては留学生を派遣し、外国の文化を摂取し、書院などを改め、西欧風の近代的学校を設立し、学問の振興を計り、発明を奨励し、新聞社を設立して、民衆の啓蒙にあたろうとしたのであり、軍事面においては、西欧風の近代的軍隊を作り上げることによって清朝を近代的な強固な独立国たらしめんとしたのである。

以上、変法運動のあらましについて考察したが、以下変法運動と学会との関連を明らかにして行けば、学会が意図したことの多くは戊戌変法の中に生かされたことがわかるのである。

まず政治面から見ていけば、学会参加者の多くは人材として起用されて変法推進者となり、変法思想の普及にあずかって力があつた。また、経済特科の新設や八股文の廃止による科举制の改革も学会

がもっていた経済特科や、西学の影響によって行なわれたと考えられる。その他冗官冗員の廃止による役所の近代化ならびに統合も、西学会、法律学会などと関連があったと考えられる。

次いで経済面の関連を明らかにして行くなれば、国家の歳出、歳入や商業の育成の点については、経済学会や算学会と関連があるし、鉄道、鉱山、農業、工業については、学会が博物館をもとうと意図したことや、農学会、地学公会、格致学会、化学会、測量学会の設立と深い関係があったと思われる。

文教面においては、留学生の派遣は学会の考えを発展させたものであるし、学堂をたてることもまさに学会が意図した事であったし、また学会は外国文化を摂取して学問を振興させようと努力したのであった。新聞社の設立も学会が最初に意図したことであった。

最後に軍事面においては、学会においても学戦会が設立されていた。

以上の考察から、変法運動と学会運動との間には当然ながら深い相関関係があったことが知られる。

このように変法運動と深い関連をもった学会運動は、すでに考察したように年代的に見た場合、外国の侵略により中国分割の危機が増大して、清朝の改革が緊急な問題となるにつれて、質、量ともに増大し、また地理的にも各地に拡大して、変法実施となって結実したのであった。

そして、変法実施は、変法推進者達の手によったが、彼等は、光緒帝の変法国是のもとに大官の推薦などにより、皇帝に召見される事によってはじめて、変法実施に参加し得たのであった。このようにして、実施された変法運動は光緒帝を頂点とし、中下級官僚層を中心とする清朝支配体制内部での一改革運動にとどまったが、ここに変法運動の限界がみられた。<sup>④</sup>

これらの変法運動の性格と限界はすでに学会参加者の階層構成が、中下級官僚層と地方郷紳層からなっている事や、大官等の援助ではじめて、学会運動を推進することが可能であったことの中に予見されるのであり、換言すれば学会運動の限界が変法運動の限界となったとも言えるのではなかろうか。

#### おわりに

以上の各節の考察を通して、以下の要約と問題点の提起が可能であると思われる。

康有為、梁啓超による変法運動は、最初上書運動という形をとっていたが、上書が未だ光緒帝に到達しないので、康有為は方向を多角化し学会運動もあわせて行うようになった。

康有為等によって開始された変法期の学会は、すぐれて政治的な性格をもっており、その意図は変法の鼓吹にあった。そしてこれらの学会は伝統的な中国在来の書院を基礎とし、その上に広学会を中心とする西欧の学会の性格を接ぎ木することによって成立したものであった。これらの学会の機能をまとめて行くなれば、多くの学会はその目的を明らかにする章程、それを運営する役員があり、附属施設としては、図書（館）、報（報刊）、博物（館）、学堂を有しているか、もつことを意図した。またここでは西洋の学問や儒学の講義、研究が行なわれ、その経済的な基盤としては、会員の寄附や会費があったが、会員外の援助を受けることが多かった。

次いでこれらの学会はその性格により次の4つに分類され。第1はすぐれて政治的な目的から設立

された政治的な学会であり、第2は啓蒙的な役割を意図して設立された啓蒙的学会であり、第3は、西洋の研究を主とする西学的学会であり、第4は、西学と儒学とをあわせ学んだ儒学的西学的学会であるが、いずれも戊戌変法に継承発展されたのであった。

最後に変法運動と学会運動との関連をまとめておけば、変法運動の推進者も学会運動の推進者も同じ中下級の官僚層であった。また、変法運動が実施した政治、経済、文教、軍事の各面における改革はいずれも学会が意図したものかそれと関係の深いものであった。そして変法運動が清朝支配体制内の一改革運動に留まったというその性格の限界はすでに学会運動の中にも予見されるのであり、学会運動の限界が変法運動の限界となったといえよう。

次節においては、報刊について考察して行く。

### 第3節 変法期の報刊

はじめに

本節では変法期における報刊の役割について考察して行きたい。<sup>①</sup>

その方法としてまず、報刊の先駆となるものを明らかにし、ついで報刊の機能と性格、報刊参加者の階層構成、報刊の年代的・地理的分布を考察し、最後に変法運動における報刊の意義を明らかにして行きたい。

#### 1、報刊の先駆

変法期における報刊の役割を考察するに当たって、まず、報刊の先駆となるものについて考察して行く。

変法期の報刊の先駆としては、二つ考えられる。一つは、従来行われて来た清朝の発行する官報であり、もう一つは、宣教師、外交官など外国人が中国にやって来るようになってできた、外国人発行の新聞、機関紙の類であるが、この場合、特に広学会の機関紙『万国公報』がはずかって力があったと考えられる。

このことに関して康有為はその自編年譜で「士大夫が外国の政事風俗に通じてないので、北京にあえて報を創り、知識を開こうという人はいない。変法の根源は北京から始り、王公大臣から始まらなくてはならない。そこで京報を送る人とはかつて、毎日、新聞を発行して清朝の士大夫に千部送った」<sup>②</sup>と述べられている。

また同様のことは、梁啓超の『戊戌政変記』にも見え、その中で梁啓超は次のように云っている。

康有為は、朝廷に変法を望んだが、そのことはすこぶる困難であった。各国の政治改革は、国民によらないでは起らないので、改革を下に倡え、国民の議論を喚起し、国民の精神を刷振しようとし、その力を厚く蓄えて、他日の用に待たしめた。そこで、自ら資本を出して、京師に『万国公報』を創り、遍く、士夫貴人に送った。梁啓超と麦孟華は文章を書き、日に2,000部を刊して



送った。③

と述べられており、まず、『万国公報』という名前で変法鼓吹のために新聞を発行したことが知られる。

ついでリチャードの自伝によれば、

広学会の月刊誌が何年もの間、清朝の治者階級に配布されても、何の反対もないことを知り、強学会では、彼等の機関紙の名前を広学会の『万国公報』とした。さらにその内容も主な部分は、広学会の『万国公報』をリプリントしたものであり、ただ一つの違いは、広学会では、上海の活版印刷であり、強学会では、北京官報に用いられている木版印刷で印刷されたものであった。強学会はこのようにして、その機関紙をして外面は政府官憲の機関紙に類似させ、その内容においては広学会によって普及された西欧思想を紹介せしめた。④

と述べられている。またリチャードの指示により、『万国公報』は名を『中外紀聞』とかえたのであった。⑤

以上のことから、報刊の先駆としては、『京報』と『万国公報』が考えられ、それによって変法を鼓吹しようとしたことが知られる。

次項においては、報刊の機能と性格を明らかにして行きたい。

## 2、報刊の機能と性格

本項においては、報刊の機能と性格を明らかにして行くが、そのために史料にもとずいて表を作成して置く。⑥

報 名	章程	役 員	関 係 学 会 学 堂	目 的
中 外 紀 聞			北京強学会	時 事、啓 蒙 学、西 学
強 学 報		主筆、帳房、書写、繙訳	上海強学会	時 事、啓 蒙 学、西 学
直 報				時 事
〔官書局報〕			北京強学会 京師大学堂	
〔官書局彙報〕			北京強学会 京師大学堂	
時 務 報	○	總 理、撰 述 各 繙 訳、理 事	上海強学会	時 事
蘇 報				時 事
知 新 報		總 理、撰 述 繙 訳、經 理、主 筆		時 事、訳 報
通 学 報				西 学
湘 学 報 (湘学新報)	○	督 校、總 理、 理 事	群 萌 学 会	時 事、西 学
湘 報			南 学 会	時 事、西 学

広 仁 報			聖 学 会	時事、中学、西学
農 学 報	○	理事、司帳、編訳	農 学 会	農 学、訳 書
天 南 新 報				
算 学 報				数 学
経 世 報				時事、西学、訳報
新 学 報			新 算 学 会	西 学
集 成 報				
質 学 報			質 学 会	中 学、西 学
実 学 報	○		尊 經 書 局	人文、社会、自然 科学
萃 報				時 事
求 是 報				時 事、西 学
訳 書 公 会 報	○		訳 書 公 会	時事（訳報、西書翻訳）
国 聞 報				時 事 （訳報、中外ニュース）
渝 報				時 事（訳 報）
蒙 学 報	○		蒙 学 公 会	児 童 作 品 の 翻 訳
演 義 報				児 童 教 育
蘇 海 滙 報				
求 我 報	○			啓 蒙（児童教育）
格 致 新 報	○			自 然 科 学
青 年				啓 蒙
蜀 学 報				時 事、西 学
無 錫 白 話 報	○			時事、中学、西学
時 務 日 報	○			時 事
東 亜 報				時 事、西 学
中 外 日 報				時（人 文）事
昌 言 報	○	総 董、総 理 総 編 訳		時 事
工 商 学 報				西 学
広 智 報				時 事（訳 報）

以上の表から、36の報刊の機能と性格を明らかにして行く。

まず章程であるが、これによって、その報刊の内容、目的が知られるが、今、章程又はそれに準ずるものが明らかになっている報刊は11である。その他は不明である。

第二に各報刊には役員が置かれているが、主な章程に見られる名前は、まとめれば次の通りである。

すなわち、総理、撰述、繙訳、督弁、校理、帳房、書写、理事、經理、主筆、司帳、総董、総繙訳等が使用されている。

関係学会、学堂としては、北京強学会、上海学会、群萌学会、農学会、南学会、聖学会、新学会、算学会、質学会、尊經書局、訳書公会、蒙学公会等、12の学会、局と京師大学堂がある。

目的としてまず踏まえて置きたいことは、変法期の報刊は、濃淡の差はあれ、いずれも政治的な要素を持っているということである。

報刊の性格を時事的、学問的、啓蒙的なものに分けて見て行くが、ここで時事的というのは、政治的側面とニュース的側面を含んだものである。

まず時事的・西学的・中学的・啓蒙的報刊について見て行く。それには、『中外紀聞』、『強学報』があり、それぞれ北京、上海強学会の機関紙であり、その後の報刊の原型となるものであった。

時事的な目的を持った報刊は、『直報』、『時務報』、『蘇報』、『萃報』、『訳書公会報』、『国聞報』、『渝報』、『時務日報』、『中外日報』、『昌言報』、『広智報』の11である。

時事的なものと西学的なものを含んだ報刊は、『湘学報』(『湘学新報』)、『湘報』、『経世報』、『求是報』、『蜀学報』、『東亜報』の6である。

時事的なものと中学西学を含んだものは、『無錫白話報』一つである。

西学的な報刊としては、『通学報』、『農学報』、『算学報』、『新学報』、『実学報』、『格致新報』、『工商学報』の7があり、中学的なものとしては、『質学報』一つが考えられる。

啓蒙的な報刊としては、『求我報』、『青年』の二がある。

次項においては、参加者階層構成について考察する。

### 3、報刊参加者の階層構成

報刊参加者の階層構成を明らかにするためにまず、参加者表を作成し、考察して行く。

報 館 名	報中の役割	氏 名	出 身	官職(又はそれに代る資格等)
中外紀聞	(創 弁 人)	康 有 為	広 東	工 部 主 事
	(撰 述)	梁 啓 超	広 東	挙 人
	"	麦 孟 華	広 東	挙 人
		李 提 摩 太	英 国	宣 教 師
		文 廷 式	江 西	翰林院侍読学士
		袁 世 凱	河 南	浙 江 温 処 道

— 39 —

	"	伍廷芳	広東				
	"	汪大鈞					
	"	陳慶年					
(翻 訳 者)	"	黎汝謙	貴州				
	"	鄧廷鏗	広東				
	"	楊葆寅	湖 南				
	"	黃致堯	江 蘇				
	"	齊 堯生					
	"	朱開第	江 蘇				
	"	張永鏗	江 蘇				
	"	鄭宗蔭	江 蘇				
	"	錢恒	浙 江				
	"	孫超	浙 江				
	"	王史	福 建				
(寄 附 金)	"	陳熾	江 西	戸 部 郎 中			
	"	李岳瑞	陝 西	工 部 員 外 郎			
	"	孫宝琦	浙 江	按 察 使			
	"	王秉恩		按 察 使			
	"	葉瀚	浙 江	生 員			
	"	鄒代鈞	湖 南	候 補 知 縣			
	"	張通典	湖 南	知 縣			
	"	繆荃孫		翰 林 院 編 修			
	"	鄭孝胥	福 建	知 縣			
	"	文廉埯		知 縣			
	"	張租翼		知 縣			
	"	黃遵措	広 東	知 縣			
(寄 附 者)	"	汪康年					
	"	梁啓超					
	"	黃遵憲	浙 江				
	"	盛宣懷	江 蘇	按 察 使			
	"	朱竹石		按 察 使			
	"	黃幼農		按 察 使			
	"	薛次申		按 察 使			
	"	黃愛棠		按 知 縣			
	"	楊某					
	"	任壽華		生 員			
	"	湖 貞甫		生 員			

— 41 —



督	弁	熊江	希仁	齡標	湖江	南蘇	翰前	林任	院湖	庶南	吉學	士政
總	理	徐黃	仁遵	鑄惠	江直	隸東	湖前	湖南	湖南	學按	政政	使導
校	理	蔡馮	鍾應	溶龍	湖江	南蘇	保署	署選	選訓	訓		
史	學	唐蔡	才鍾	常溶	湖江	南蘇						
時	務	易唐	才鍾	鼎常	湖江	南蘇	廩				生	
與	地	楊李	毓鈞	麟翥	湖湖	南南	拔廩	貢	舉		人	
算	學	胡姚	兆丙	鸞奎	湖湖	南南	廩廩				生	
商	學	鄒晏	代忠	鈞悅	湖湖	南南	廩候	運	知		生	
交	學	徐湯	崇家	立鵠	湖湖	南南	廩附				生	
創	學	鄒金	湛金	湛鰲	湖湖	南南					生	
編	學	楊左	鄒伯	麟博	湖湖	南南	舉童				人	
(寄	學	周黃	伯固	英松	湖湖	南南	拔廩				貢	
稿	學	李陳	鈞佐	棠熹	湖湖	南南	廩附				生	
者)	學	廖劉	為鈞	樹鎰	湖湖	南南	廩優				生	
	學	陳李	廷才	輝常	湖江	西	附				生	
	學	鄧唐	楊周	概梓	湖湖	南南	廩附				生	
	學	熊譚	希嗣	齡同	湖湖	南南	翰候	林補	院知	庶知	吉府	士貢
	學	唐畢	才永	常年	湖湖	南南	拔拔				貢	

鈞	乘	蔡	湖	南	廬	生
易	皮	易	湖	南		
嘉	熊	皮	湖	南		
崇	樊	熊	四	川	生	員
煦	楊	樊	湖	南		
錐	何	楊	湖	南	廬	生
玉	黃	何	湖	南		
保	劉	黃	湖	南	長	沙
嶺	李	劉	湖	南		女
曾	潘	李	湖	南	清	州
永	周	潘			會	同
學	戴	周	湖	南	縣	教
會	戴	周	湖	南	論	
昌	鄭	戴	湖	南	候	選
誠	楊	鄭	湖	南	訓	導
虞	汪	鄭	湖	南		
榮	張	汪	湖	南	廬	生
概	伍	汪	湖	南		
玉	梁	張	湖	南	舉	人
雲	黃	伍	湖	東		
雲	劉	梁	湖	南		
架	姜	黃	湖	南		
超	羅	劉	湖	南		
敬	洪	姜	湖	南		
架	徐	羅	湖	南		
坤	彭	洪	湖	南		
棠	黃	徐	浙	江	湖南官吏(官職不明)	
治	許	彭	湖	南		
壽	陳	黃	湖	南	湖	南
璽	黃	許	江	西	巡	撫
憲	楊	陳	湖	南	前	署
超	李	黃	江	蘇	知	監
格	向	楊	湖	南	書	院
秋	曾	李	湖	南	翰	林
鈞	喬	向	湖	南	刑	部
南	皮	曾	湖	南	主	事
瑞		喬	湖	南	江	西
		皮	湖	南	南	昌
			湖	南	經	訓
			湖	南	書	院
			湖	南	主	講



訳書公会報	総 董	憚 積 助					
	"	胡 念 修	浙	江			
	"	趙 元 益	江	蘇			
	"	陶 湘 麟	江	蘇			
	総 理	憚 毓 麟	江	蘇			
	進 董	康 綬 金					
	主 筆	章 炳 麟	浙	江			
	"	五 湖 長					
	総理繙訳	董 存 嘉	江	蘇			
	法 文	吳 宗 濂	江	蘇			
	"	袖 海 客					
	"	黃 資 榮	浙	江			
	"	周 伝 謙	浙	江			
	英 文	張 国 珍	浙	江			
	"	胡 惟 志	浙	江			
	"	張 書 紳	浙	江			
	"	錢 家 驥	浙	江			
	"	張 令 宜					
	"	沈 晋 熙	江	蘇			
	"	陳 珮 常	浙	江			
	德 文	楊 其 昌	江	蘇			
	日 文	安 藤 虎 雄	日	本			
	総理銀錢帳務	楊 紹 椿	浙	江			
	"	憚 彦 博	江	蘇			
	"	凌 義 培	浙	江			
	(寄 稿)	徐 建 寅	江	蘇			
国 聞 報 (国聞彙報)	(発 起 人)	嚴 復	福	建	北洋水師学堂総教習		
	"	夏 曾 佑					
	"	王 修 植					
渝 報	総 理	宋 育 仁					
	主 筆	繙 清 蔭					
蒙 学 報	編 輯	葉 瀚 祐	浙	江	生 員		
	会 友	晏 振 祐	江	蘇	奉 賢 訓 導		
	"	伍 湛 忠	広	東	候 補 知 県		
	"	姚 錫 光	江	蘇	候 補 知 県		
	"	茅 謙 林	江	蘇	学 附 生		
	"	陳 慶 林	江	蘇	附 生		

生	領	附	建	福	元	桂	陳
生		附	蘇	江	模	朝	王
事	知	正	江	浙	麟	昌	王
事	補	候	徽	安	清	振	鄒
人		舉	蘇	江	庭	毓	吳
人		舉	徽	安	鈺	經	李
授		教	徽		華	殿	桂
員		生			如	淡	晏
事		主			卿	範	王
					之	厚	桂
					初	伯	章
					和	仲	章
					甫	萃	翁
					元	紹	薛
					甲	開	朱
					理	顯	王
					顯	姜	向
					蓮	悅	陸
					馨	藻	項
					飛	朱	王
					曾	張	王
					彬	朱	王
					新	維	王
					庭	幼	王
					鏤	葆	樊
					仁	育	宋
					英	之	吳
					芳	毓	裘
					梁	毓	裘
					之	廷	顧
					階	植	吳
					仁	蔭	汪
					軒	子	丁
					年	梅	汪
					首	康	韓
					煌	晏	蔡
						乃	

昌言報	監	督	沈仲赫	浙江	進士
	經	理	汪康年	浙江	進士
	總	董	梁鼎芬	廣東	知府
	總	識	曾廣銓	湖南	知府
	日	文	古城貞吉	日本	
	法	文	潘彥麟	江蘇	
工商學報	筆	述	章炳麟	浙江	
	"		蔣維高		
廣智報	編	輯	張德坤		
	創	弁	倚劍生		

以上の参加者表から、まず考えられることは、参加者の判明している報刊は、第2項であげた36の報刊のうち30である。今、参加者の判明していない報刊をあげれば、『経世報』、『新學報』、『集成報』、『質學報』、『青年』の5である。

ついで、報中の役割であるが、すでに章程などに見られる役員については、第2項で触れたので、ここでは具体例としてあげて置くに留める。

参加者で氏名の判明している者は、延べで313人いる。もっとも同一報で色々な役割を果たしている者については、1人として数えた。その派別は、学会と同様、右派、中間派、左派である。

つぎに、参加者の出身地を多いものから表示すれば次のようになる。

順 位	省 名	人 数	順 位	省 名	人 数
1	湖 南	58	10	四 川	2
2	江 蘇	40	12	河 南	1
3	浙 江	31	12	貴 州	1
4	広 東	26	12	陝 西	1
5	福 建	8	12	英 国	1
6	江 西	7	12	仏 国	1
7	安 徽	5			
8	直 隸	3			
8	日 本	3			
10	広 西	2			

これによれば、湖南、江蘇、浙江、広東の人達が活躍しているということであり、当然の事ながら、学会参加者と相関関係を持っている。もっとも人数の比率はそれぞれ異なる。



最後に参加者の階層構成を表示すれば、次の通りである。

官 職 (又はそれに代わる資格等)			人数	官 職 (又はそれに代わる資格等)			人数
品 秩				品 秩			
巡 撫	従 二	2		県 教 諭	正 八	1	
按 察 使	正 三	8		県 訓 導	従 八	1	
道 員	正 四	2		翰林院庶吉士		2	
翰林院待読学士	従 四	1		領 事		2	
知 府	従 四	4		湖 南 省 官 吏		1	
部 郎	正 五	4		進 士		1	
給 事 中	正 五	2		挙 人		1	
員 外 郎	従 五	1		生 員		33	
知 州	従 五	1		学 堂 総 教 習		1	
主 事	正 六	5		学 堂 教 習		1	
学 政	正七品以上	2		書 院 長		1	
知 県	正 七	11		書 院 主 講		1	
翰林院編州	正 七	5		女 師		1	
教 授	正 七	1		宣 教 師		1	
内 閣 中 書	従 七	1					

すなわち、生員、知県、按察使にかたよりが見られ、按察使（正3品）を最高にして正7品以下の下級官吏と未入流の者が多かったことが知られる。

次項においては、報刊の年代的分布を考察する。

#### 4、報刊の年代的分布

報刊の年代的分布を明らかにするに当って、まず、報刊の設立年代表を作成し、それにもとづいて考察を加えて行きたい。

年 代		報 刊
光緒21年 (1895)	7月	中外紀聞
	9月	強 学 報
		直 報
光緒22年 (1896)	7月	時 務 報
	～	蘇 報
光緒23年 (1897)	1月	知 新 報 通 学 報
	3月	湘 学 報 湘 報 広 仁 報
	4月	農 学 報
	6月	算 学 報
	7月	経 世 報 新 学 報 質 学 報 集 成 報
	8月	実 学 報 萃 報 求 是 報
	9月	訳書公会報
	10月	国 聞 報 渝 報 蒙 学 報 演 義 報
		蘇海滙報
光緒24年 (1898)	1月	求 我 報
	2月	格致新報 青 年
	3月	蜀 学 報 無錫白話報 時務日報
	5月	東 亜 報
	7月	中外日報 昌 言 報
	8月	工 商 学 報
	?	広 智 報

設立年代表からまず考えられることは、光緒21年（1895年）に設立された報刊が3つあることである。そのうち『中外紀聞』、『強学報』は、北京、上海強学会の機関紙として、時事的西学的中学的啓蒙的性格があった。その外、この年には、時事的な『直報』が発行されている。

北京強学会、上海強学会は、いずれも弾圧されたが、特に上海強学会の再生として、時事的な内容を持った『時務報』が光緒22年（1896年）に発行されている。またこの年、『蘇報』も発行されている。

次項においては、報刊の地理的分布について考察する。

# 5、報刊の地理的分布

まず、報刊の設立地域表を作成し、それにもとずいて、報刊の地理的分布を明らかにして行く。

年代	直 隸		四 川	湖 北	湖 南	江 蘇		浙 江	広 東	広 西	澳 門
	北 京	天 津				江 蘇	上 海				
光緒21 (1895)	中外紀聞	直 報					強 学 報				
光緒22 (1896)							時 務 報 蘇 報				
光緒23 (1897)		国 聞 報			湘 学 報 湘 報		通 学 報	経 世 報		広 仁 報 知 新 報	
							農 学 報				
							新 学 報				
							集 成 報				
							算 学 報				
							実 学 報				
							萃 報				
							求 是 報				
							蒙 学 報				
							演 義 報				
							訳書公会報				
光緒24 (1898)		蜀 学 報				無錫白話報	求 我 報	広 智 報			
							格致新報				
							青 年				
							時務日報				
							中外日報				
							東 亜 報				
							昌 言 報				
							工商学報				
計	1	2	2	1	2	1	23	1	1	1	1

以下、報刊の設立地域表から考察されることを明らかにして行く。

中国の各省別の報刊数をまず明らかにして置く。直隸3、四川2、湖北1、湖南2、江蘇24、浙江1、広東1、広西1、澳門1である。

直隸に設立された報刊は、まず、光緒21年(1895年)に、政治的な学会である北京強学会の機関紙として、時事的西学中学的啓蒙的な『中外紀聞』があり、同年天津では、時事的な『直報』が発行され

ている。また、光緒22年（1896年）には、天津で、外国の新聞の繙訳や内外のニュースを中心とする時事的な『国聞報』が設立されている。

四川で設立された報刊は、まず光緒23年（1897年）に、外国の新聞の繙訳を中心とする、時事的な『渝報』が発行されている。翌光緒24年には、『蜀学报』が発行されたが、これは西学的なものと時事的なものが含まれていた。すなわち、四川で設立された報刊は、時事的な報刊が中心であり、それに西学的なものが加味されていた。

湖北省に設立されたのは、光緒23年（1897年）の『質学报』だけである。『質学报』は質学会の機関紙であり、中学西学的であったと考えられる。

湖南で設立された報刊は、光緒23年に、『湘学报』（後に『湘学新報』と改称）、『湘報』の2つであり、時事的、西学的であった。

江蘇省で設立された報刊は、まず、光緒21年（1895年）には、政治的な上海強学会の機関紙として『強学报』が発行されており、これは、時事的西学的中学的啓蒙的である。光緒22年（1896年）には、時事的な内容を持った『時務報』と『蘇報』が発行されている。

光緒23年（1897年）には、西学的内容を持った報刊としては、『訳書公会報』、『通学报』、『農学报』、『新学报』、『算学报』、『实学报』、『演義報』、『蒙学报』、『集成報』の9つがあり、時事的なものとしては、『萃報』があり、時事的西学的なものとしては、『求是報』がある。不明が『蘇海滙報』である。

光緒24年（1898年）には、西学的な報館としては、『格致新報』、『工商学报』、の2つが設立されており、時事的なものとしては、『時務日報』、『中外日報』、『昌言報』の3つが設立されており、時事的西学的なものとしては『東亜報』が、時事的中学的西学的なものとしては『無錫白話報』が設立されている。また啓蒙的なものとしては『求我報』、『青年』の2つが発行されている。

総じて云えば、中国の中で江蘇省が最も報刊の設立数が多く、そのほとんどが上海に設立されている。報刊の内容を見れば、時事的西学的中学的啓蒙的なものは1、時事的なものは7、学問的なものが9、時事的学問的なものが3、啓蒙的なものが2であり、学問的なものが最も多い。

上海を中心に西学的、時事的な報刊が設立されたのは、上海には、宣教師を中心とする外国人の往来があり、その影響を受けて、でてきたものと考えられる。

浙江省に設立された報刊は、光緒23年（1897年）の『経世報』であり、時事的西学的な報刊であった。

広東省に設立された報刊は、光緒24年（1898年）にできた『広智報』であり、時事的なものであった。広西省に設立された報刊は、光緒23年（1897年）にできた『広仁報』であり、中学的西学的なものであった。

澳門では、光緒23年（1897年）時事的な内容を持った『知新報』が創刊されている。

以上、報刊の地理的分布について考察したが江蘇省が最も多い。それは西学的なもの、時事的なものであったことが知られる。またとりわけ上海に多く報刊が設立されたのは外国人と関係が深かった



からであろう。

次項においては、変法運動における報刊の意義について考察して行く。

## 6、変法思想の普及と報刊

北京強学会の機関紙として創刊された『中外紀聞』を最初とする変法期の報刊は、『強学報』に拡大して行ったが、清朝の弾圧によって廃刊の己むなきに至った。

しかし、光緒22年、『時務報』の創刊により、活気を取りもどし、変法期の報刊は、光緒23年、24年の変法実施前にピークに達した。

また、これらの報刊を荷なった人々は、下級官僚ならびに未入流の人達であり、報刊の多くは上海に設立され、変法思想を普及するという啓蒙的な役割を果たしたのであった。

このことに関して、梁啓超は、報刊を上下を通じさせる喉舌のようなものであり、国事に有益であると述べている。<sup>⑦</sup>また、戈公振氏は、『中外紀聞』を始めて人民論政を開く端となったとされており、<sup>⑧</sup>湯志鈞氏は、報刊の宣伝目的を全国的な範囲で維新の空気を作り出すものであるとしておられる。<sup>⑨</sup>

以上総じて、変法運動に対する報刊の意義は、中国に変法思想を普及して、変法体制を作り上げて行った所にあると云えるだろう。

## おわりに

いままで、変法運動における報刊の役割について考察して来たが簡単にまとめておく。

まず、報刊の先駆としては、清朝の官報である『京報』と広学会の機関紙である『万国公報』が挙げられる。それが拡大発展して行くことになる。

報刊の機能と性格については、まず、報刊には、章程があり、その目的が知られる。ついで役員が運営し、3分の1の報刊が学会と関係がある。また報刊の目的としては、時事的啓蒙的西学的中学的なもの、時事的なもの、時事的西学的なもの、時事的中学的西学的なもの、西学的なもの、中学的西学的なもの、啓蒙的なものの7つがある。

報刊参加者の階層構成について見て行けば、その出身地域は、湖南、江蘇、浙江、広東などにかたよりが見られ、参加者の階層構成としては、生員、挙人、知県など、未入流、下級の官僚にかたよりが見られる。

報刊の年代的分布については、変法実施前の光緒23年、24年がピークになっている。

報刊の地理的な分布としては、江蘇省にかたよりが見られる。

変法運動における報刊の意義としては、変法思想の普及にあったと考えられる。

以上、変法運動における報刊の役割について、考察して来たが、すでに述べたように、報刊においては、なんといっても、変法思想を普及し変法体制を作り上げて中国を近代化して行こうと努力したことが知られる。またそれによって、戊戌変法も実施された。